
大講義教養科目オンライン授業の改善に向けて

研究代表者 竹内 綱史 (経営学部)
共同研究者 渋谷 亮 (文学部)
手嶋 英貴 (法学部)
手嶋 泰伸 (文学部)
東山 薫 (経済学部)
藤原 崇人 (文学部)

はじめに

本プロジェクトは、昨年度（2020 年度）の同 FD「大人数教養科目におけるスキルアップ」からの継続として、大人数の教養科目におけるオンライン授業の課題やノウハウを共有し、オンライン授業の長所と短所を明確化し、より効果的・効率的なものへと改善することを目的とするものであった。そのために三回の研究会を開催した。以下、それぞれの研究会の概要を述べる。

1. 第一回研究会：大講義オンライン授業における成績評価

日時：2021 年 9 月 13 日（月）13 時半～14 時半（ネットワークトラブルで中断）

2021 年 10 月 6 日（水）15 時 15 分～17 時 45 分（再開催）

場所：オンライン（Zoom）

報告者：手嶋英貴（法部教授）

島村健司（龍谷大学ライティングサポートセンタ・スーパーバイザー）

昨年度来のオンライン授業では、従来の対面授業とは異なる状況で成績評価を行わざるを得ず、教員各自で試行錯誤せざるを得なかった。そこでオンライン授業における成績評価の工夫を共有するとともに、ライティングサポートセンターの活用についてセンターの方にお話しいただき、意見交換をした。以下は各報告と質疑応答の記録である。

手嶋報告

事例紹介：「アジアの文学 A」期末レポート指導の流れ

本報告では、2021 年度新設科目「アジアの文学 A」における授業運営上の工夫を、他授業にも応用可能な FD 事例として紹介した。具体的には、各回授業の出席要件となる課題「コメントシート」を期末レポートの内容に関連づける試みを、以下の 4 項目に分けて説明した。

- (1) 授業概要：アジアに広く伝播した主要な伝統文学を紹介し、その内容や特色を理解することを目的とする。また、それらの文学伝統がアジア各地で果たしてきた社会的・文化的役割を理解するも狙いとする。「西遊記」（東アジア）、「ラーマヤナ」「マハーバーラタ」（南アジア）、仏教文学（南・東・東南アジア）を軸としつつ、アジア各地域の重要な文学を取り上げる。

- (2) コメント課題と期末レポート：当該科目の成績は「コメント課題：40 点満点（3 点～5 点満点 × 12 回）」および「期末レポート：40 点満点」という二つの構成要素からなる。このうち、期末レポートは「1. アジアの文化・社会における伝統文学の意味」「2. アジアと日本の伝統文学：つながりと差異」という 2 章構成をとり、各章において「個別の観点による項目を 2 つ以上つくる」、および「各項目で具体的な事例を挙げる」という条件を満たすことを求めている。そして 12 回の授業で履修生が取り組むコメント課題の内容はすべて、期末レポートの作成時に直接的、間接的に生かされる情報ないし思考の蓄積を兼ねるものとしている。その結果、各回のコメント課題に丁寧に取り組むことで、当該課題の得点が高くなるだけでなく、その努力の蓄積が期末レポートの得点、ひいては 1 学期の総合成績をも押し上げることに繋がる。履修生には授業開始時にこのことを強調し、またその後も折々に意識付けを行った。
- (3) 取組みを有効化するための工夫：上述のねらいとそれに向けた取組みをサポートするものとして、「A. 文章表現の指導」「B. 提出課題コメントの共有」「C. 意見共有セッションの開催」という 3 つの工夫を行っている。A では、レポートに相応しい文章表現を具体的に解説した資料と動画を共有し、それを踏まえた文章で各回のコメント課題を書くことを促し、採点においてもその要素を重視した。B では、各回でオンライン提出された全履修生のコメントを、匿名処理をしたうえで 1 つの PDF 資料にまとめ、迅速に共有した。その上で、自己の提出物を他の履修生のそれと比較し、コメントの質を高めていく参考材料にするよう指導した。この工夫は、文章表現のスキル向上に加え、他者の多様な視点・意見を知る格好の機会を履修生に提供することともなっている。C では、1 回の授業全体を使い、教室でのグループディスカッション、および GoogleMeet のチャット機能を活用した意見共有を行った。B の取組み（一定の自発性が必要）にあまり積極的でないタイプの履修生に対しても、アクティブラーニングの手法を取り入れることで、多様な意見・視点を知ることの意義を意識させる機会を作るよう努めている。また、チャットで共有した意見も、匿名処理をしたテキストを共有した。
- (4) 取組みの有効性に関する考察：学期末に行った「学生による学期末の授業アンケート」の結果を紹介し、有効性の推測と今後の課題を整理した。最後に、「学期末まで授業に参加していながら単位未修得に終わった履修生」を対象とするメールによる事後指導（単位不認定になった事由、および今後同科目で単位を修得するための努力ポイントの説明）の具体例も紹介した。

手嶋報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

- 成績で不可をつける学生に対して事前に指導をしているそうだが、学生からどのようなアクションがあるのか。
- 素直に受け取る学生と返信の無い学生がいるが、トラブル防止の観点から行っている。
- コメントカードとレポートを組み合わせる成績評価の場合、事後指導のメールをどのように行うのか。
- レポートに取り掛かる前にこまめに成績の現状を教えてあげられれば親切なのかもしれないが、現状では全部の成績が確定してから行っている。
- 毎回コメントシートを提出させることについて、学生から負担であることを訴えられることはないか。
- アンケート結果からみると、6 割程度の学生は多いとは思っていないようである。
- 学生のコメントを公開する際、学生から苦情は無いのか。

- 事前に周知しているので、そうしたことは現時点では無い。
- 授業への関わり方に対する熱意の低い学生をどのように振り向かせているのか。
- 動画作成に時間をかけ、見ていて楽しめるものを提供している。テロップなど、動画コンテンツを丁寧に作っている。

島村報告

島村氏の報告は、本学に設置されているライティングサポートセンター（以下 WSC と略記）の活動について概要を説明したものである。

WSC は本学学生のレポートや卒業論文などのアカデミックライティングに関わる相談に応じ、それらを支援する目的で 2018 年に設置された。学生の論理的な思考を養い、それに伴う表現技術を高め、かつ読み書き能力にくわえて分析力を向上させることを理念とする。

深草・大宮・瀬田各学舎で開室しており、ライティングスーパーバイザー1 名とチューター（大学院生）20 名前後が在籍し、学生からの相談の対応に当たっている。対応は一对一を基本とする。なお、学生に考えさせることに主眼を置くため、「指導」ではなく「アドバイス」を基本姿勢とし、かつそのアドバイスも各分野の専門的な内容には踏み込まない。利用実績はコロナ禍以前の 2018-2019 年には年間 1,000 人を超えていたが、2020 年には 300 人台に落ち込んだ。

WSC のひとつの特徴が教員との連携であり、レポート作成に関わる出張講習を実施しているほか、教員との事前打ち合わせを行い、その内容に基づいて、受講生の課題レポートの作成を支援することにも対応している。

つぎにチューターの育成に関して。チューターは、採用されると「採用時研修」を受け、つづいて「現場研修」、そして経験者の随伴による学生対応を経て、ひとり立ちする。この間、おおむね3 か月ほどを要する。すなわち前期に採用されたチューターが単独で学生に対応できるようになるのは、その年度の後期からということになる。人材育成に一定の時間がかかることに留意しなくてはならない。

さいごに、相談に訪れた学生への対応の流れとしては、「基本事項の聞き取り（科目、担当教員、課題内容）」→「目標設定」→「着眼点（テーマ設定や全体構成など大きな視点から入る）」→「目標達成度の確認（相談ポイントの振り返り、設定目標の達成度合いの自覚を促す）」となっている。この流れを基本として課題内容を識別し、たとえば論証型レポートが課せられている場合には、以下に留意したアドバイスを行っている。

- ・序論：対象の設定、問いの提示、問いの重要性の説明、問いへの答え、論の展開
- ・本論：主張を支える根拠の提示（情報整理）、その根拠に対する考察
- ・結論：問いや本論におけるポイントや答え（主張）の簡潔な提示

島村報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

- ライティングサポートセンターに持ち込まれるレポートの分野は多種多様であるが、どの程度まで考察の書き方を指導しているのか。ケース・バイ・ケースで掘り下げるのか、一般的な論理展開の指導となるのか。
- 根拠・論拠を提示して考察ができていいのかという一般化した論理展開を各チューターがチェックしている。
- 学生がオリジナリティーの出し方で躓いているということだが、もう少し詳しく説明して欲しい。
- 分析する対象が大きすぎて、一般論に落着いてしまい、メディアで流布されるような言説に終始してしまっている学生が多いということ。また、漠然とした興味関心があ

- っても、それを分析対象の具体化・明確化に落とし込んでいけない学生も多い。
- 「てにをは」の修正などはライティングサポートセンターで行っているのか。
 - ライティングサポートセンターは答えを教えることはできないので、赤入れ修正のようなことはできないため、「てにをは」の修正は難しい。特に、留学生対応で苦慮するところである。
 - 学生に課題を出す際に注意すべき点として、どのようなことがあげられるのか。
 - 整理型（講義内容や調べたことをまとめるもの）なのか、それとも論証型（考えを述べるもの）なのかということを、学生が把握しやすいように課題を出すことが大事だと考えられる。

2. 第二回研究会：オンライン授業における TBL 導入について

日時：2021 年 12 月 22 日（水）15 時 15 分～16 時 45 分

場所：オンライン（Zoom）

報告者：中田裕子（農学部准教授）

近年、グループワークなどの TBL（Team Based Learning）を授業に取り入れる試みが盛んになってきたが、昨年度来のオンライン授業では、それがかなり難しくなってしまった。そこで今回は、オンライン授業において可能な TBL の工夫を共有し、意見交換をした。以下は報告と質疑応答の記録である。

中田報告

[授業名]

- ・ 教養教育特別講義「東アジアの未来：龍谷大学からアジアの平和を構想する（9 名の教員によるリレー講義、2 セメ、受講生 70 名程度）
- ・ 奥野恒久先生（政策学部教授）と 2 人で中心的役割を担う
⇒教養教育特別講義とは：1 年ごとに教養教育会議に諮り、承認してもらう。申請にあたって特に決まり等はなく、部会ごとに提案する。特別講義は、新しい授業を提案した際に、どのように進めていけばよいのかということを試験的に実施する目的がある

[授業形式]

- ・ 2019 年までは対面授業。COVID-19 以降はオンライン（Zoom）授業
- ・ チーム基盤型学修法（TBL：Team Based Learning）
⇒「事前学修」（例：冊子を読ませる、簡単なクイズを出題する）、「事後学修」を学生に行わせ、授業は「チーム討議」「クラス討議」、そしてそれらをまとめる「教員からのメッセージ」で構成されている。ただし、この授業では「チーム学修」は実施せず
- ・ TBL（Team Based Learning）を用い、知識の習得のみならず、学生自身が知識を応用し学びを深めていくことを目指す
- ・ 講義 45 分⇒ディスカッション 25 分⇒グループ発表 20 分
- ・ Zoom でグループ分けをし、各グループに教員は介入しない。各グループで進行係、報告者とディスカッション内容をまとめる書記を決める

[講義概要]

- ・ 東アジアの平和をどのように考えるか、ということを学生に自分の身に引きつけ

て考えてもらう

- ・ 様々な歴史、社会問題（例：慰安婦・徴用工問題、靖国問題）をピックアップして講義をし、学生自身がそれらをどのように捉え、そしてどのように解決できるのかについて話し合わせる
- ・ 最終的には、学生ひとりひとりに東アジアの未来について構想してもらう
⇒自主的に学修を進められる環境を整え、批判的な目を涵養することを目的とする

[TBL の利点]

- ・ 基礎知識の内在化を効果的にできる
- ・ iRAT（自宅で取り組むクイズ）から tRAT（授業で取り組むクイズ）へ、知識内在化から顕在化へのプロセスを移行させやすい
- ・ iRAT から tRAT へ、そして Discussion（知識の内在化から顕在化、そして創造力への発展）
- ・ TBL の参加度（Engage and Create）を学修者自身が自己評価できる評価記録表を本教材で紹介する

[本講義での不安]

- ・ 非常に大きな討論テーマに対して、学生たちが自主的に討論できるだろうか？
- ・ オンラインで顔出しも要求していなかったため、グループ分けして議論が進むか？

[実践例]（第 2 回「20 世紀初頭の東アジア」——大谷探検隊の収集品について）

◆ 講義内容

- ・ 日本の中国への進出・植民地支配について、帝国主義とはどういうものか

◆ ディスカッションテーマ

- ① 帝国主義時代の植民地化における現代への影響について、どのように考えるか
- ② 各国が植民地などから収集した貴重な文物は、今後どのように保存すればいいと考えるか

◆ 学生グループの回答例

①について

- ・ 国境が雑に決められてしまったことや、言語や宗教が昔植民地だった国に残っていてそれが原因で争いが起こること。白人が有利で黒人が不利みたいな風潮がまだ完全になくなっていないということ
- ・ 植民地での押し付けられた産業と言ってもその土地特有の文化や産業が失われていたら人類にとって意味がないのでその場合先進国が助ける責任がある
- ・ 宗教や民族紛争が大きな問題である、それによりインフラ整備など他国からの支援を得ることが困難であること。資源の争奪、無抵抗の黒人の射殺事件などの差別意識

②について

- ・ 植民地から収集したものであるからもとあった場所に返すことがいいと思っていましたが、意見を聞いて植民地だった国に丁寧に保存できる環境がない場合は収集した国が責任を持って保管することが大切だとも思いました。また、植民地から貴重なものを奪ったという歴史も講義を聞いて初めてわかるものもあったので歴史を学ぶという意味で収集した国に置いておくのも一つの手だと思いました
- ・ 植民地があったという証拠として双方の国できちんと保存するべきだと思う
- ・ 理想としては自国の文物は自国で保存することだが、困難ではないか。レプリカを先進国に展示することで多くの人に見てもらう。遺した人の国で保管し歴

史を学ぶべき

⇒当初の心配に反して、教員が介入しなくとも、学生のみで活発なディスカッションが行われていた

⇒自分と同じ意見ばかりではなく、異なる意見を聞くことが学生のディスカッションを深めたようであった

[オンライン授業のメリット]

- ・ Zoom によるスムーズなグループ分けが可能
- ・ オンラインなので対面よりも気楽に討論が可能⇒より本音を話せる？
- ・ 大勢の前での発言も比較的容易なため、自由な意見が出る傾向にある

[オンライン授業のデメリット]

- ・ 発表の際に発言者が固定化する
- ・ ディスカッションテーマにかかわらず、発言しない者が何人か存在
- ・ 顔出しを強制していないため、学生が孤独感を覚える？
- ・ 授業を受ける場所の問題（図書館などでは発言しにくい）⇒来年度は教室を用意すべきか？
- ・ 学内の WiFi の問題（ディスカッション中に毎回 2、3 人が WiFi の問題で入退室を繰り返し、議論が中途半端になることがある）

⇒授業の質を高めるために、WiFi の安定性は重要

中田報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○グループは何人ずつなのか。

●5 人から 6 人になるように調整している。

○シートは成績評価に使うのか。進行係等をしたらプラスになるとかあるのか。

●平常点として出したら 4 点にしている。役割で加点等はない。

○対面とオンライン参加両方いることはないのか。

●配慮申請の学生が 1 人だけいて、その子のために録画はしているが、対面での討議に Zoom 等で加わるのはやりにくいだろうという判断から、中継をして入ってきてもらうということはしてない。配慮申請の学生は録画を見てレポートを書くということになっていて、そこは課題である。

○配慮申請をしている学生が複数いる授業では、オンライン参加している学生だけでルームをつくることができる。そういう学生が 1 人しかいないときは確かに難しく、教員がその学生と討論するというをやったことがある。

●なるほど。ありがとうございます。

○Zoom のそういうディスカッションはどんな雰囲気なのか。

●和気あいあいとスムーズに進むところと、ちょっと静かなところがあるが、静かなところも何とか自力で乗り切ってもらうのもこの授業の目的の一つと考え、あえて口出ししないようにしている。割と和気あいあいとやっているグループが多い。

○時間配分をより詳しく教えてほしい。

●manaba にレジュメをアップしておき、45 分講義、グループディスカッションが 25 分、発表の時間が短くて 20 分。9 グループくらいあるので 1 グループ 2 分くらいで報告させる。そのためディスカッションのテーマは 1 個だけにしている。講義をせずに、前回の授業を踏まえて、丸々討論の時間にしてテーマを 2 個にしたこともあったが、やはり講義をしないとディスカッションも温まらない。

○最後の教員からのコメントに時間が残らないのでは。

- 発表の 20 分は動かさないようにして、ディスカッションのところで少し融通するようになっている。
- 自宅で取り組むクイズと授業で取り組むクイズというのはどういうものなのか。
- クイズは本当に簡単なもので、ただ、レジュメを読まないといけないものを出している。
- 今のコロナの状況で対面のグループディスカッションをしても大丈夫なのか。距離を取らなきゃいけない上に、みんなマスクしているから声が届かないということはないか。
- 広めの部屋を使いあまり近づかないようさせ、マイクで発表してもらうときは、マイクを一回一回拭いて渡すようにしている。
- アクティブラーニングを導入すると教科内容を減らさざるを得なくなると言われるが、そういうことはないか。
- その点はたしかにそうだなと言わざるを得ない。ただ、少し上の先輩の意見とかを聞いて、同世代でこんなことを知っている人がいるという衝撃がやっぱり大きいようだ。どうも龍大の学生は自信がないところがあるので、他の学生から刺激を受けて、勉強するきっかけを得ることがアクティブラーニングの意味だと考えている。また、心掛けているのは、とにかく褒めること。分からないからって自信なさげに発表する場合があるが、分からないっていうことをきちんと理解して、それをみんなの前で発表できるってというのは本当すごいことなのだというようにしている。特に戦争とか非常に人権とか、そういった重いテーマに答えなんか出せるわけがないんだと。
- センシティブな内容でグループ討論をしてもらうときは三つの約束を言うことにしている。①他人の意見を否定したりちゃかしたりしない、②ここの話は他言しない、③自分の考えを変えてもいい、の三点。約束ですって言うと、ちゃんと守ってくれる。
- ありがとうございます。
- 討論をチームでさせて、何を報告させるのか。
- グループで出た意見を報告してもらう。5 個出たグループもあれば 1 個だけしかないっていうグループもある。それは学生たちに委ねている。
- やはり無理やり 20 分で結論を出そうということならないほうが良くて、逆にいかに未消化というか、やった気にさせないほうが実はこういったチームアクションでは大事なのではないか。チームごとに分けるのは、結論を出すことでなくて人の意見を聞かせるためなので、それだったらいっそのこと、報告も教員が当てて良いのではないか。そうすると議論に参加させる動機にもなる。それに、チームで何か答えを出すわけでないのであれば、もう徹底的にグループ分けするのは議論のためで、もう個人個人に焦点を当てて、何人かに代表して報告してもらって、毎回報告者はシートを出さなくてもいい、報告しなかった人はシートで出してもらうという方法ができるのではないか。
- 毎回同じ方法でなくていいのかもしれない。この先生はこういうやり方であの先生はこういうふうにするという形でもよいかもしれない。そうすると学生にも緊張感が出るだろう。

3. 第三回研究会：教養教育におけるオンライン授業と対面授業の

メリット・デメリットを考える ――測定と評価の視点から

日時：2022 年 2 月 22 日（火）15 時 15 分～16 時 45 分

場所：オンライン（Zoom）

報告者：渋井進（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 研究開発部 教授）

コロナ禍のためオンライン授業が大々的に導入されて2年がたち、その欠点のみならず利点も見えてきた。それとともに、従来型の対面授業もまた問い直されざるを得なくなっている。そこで、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 研究開発部の渋井進教授をお招きし、教養教育におけるオンライン授業・対面授業双方のメリット・デメリットについてお話しいただいたうえで、意見交換をした。以下は報告と質疑応答の記録である。

渋井報告

◆教養教育とは

教養教育の定義を確認し、大綱化以降の教養教育の展開を検討したうえで、教養教育の責任主体が曖昧化されているという現状が論じられた。さらに講師が携わった教育センターの教養教育改善の試みについて紹介がなされた。その経験から、学修実体・学修成果に関する調査はしばしば、現状把握を目的としているため、直接的に改善案を導ける設計ではなく、また質的に違うものを比較していることも多く、いかに調査を設計するかが重要であることが示された。とりわけ、他大学との比較や具体的提言に結びつく調査を行うことが必要であるとされた。次に学修成果と学生調査に関して、多様な測定方法の紹介が行われた（直接的な測定方法や間接的な測定方法など）。また海外では、標準試験を導入しつつ、学生調査をプロセス評価として活用することが推進されているという。そのうえで学修成果の測定を全学的な内部質保障システムの内にもどのように位置づけるか、個々の教員まで協力を得るためにはどうすればよいのかなどが重要であることが確認された。

◆オンライン授業のメリット・デメリット

まず、これまで多様な調査がなされてきたことが確認された（遠隔授業のメリット：自分のペースで学修可能、復習可能など。遠隔授業のデメリット：対話的な学修ができない、臨場感がない、など）。そのうえで、複数人同士の面談（一方が他方を評価するための面談）における遠隔と対面の違いについての調査が紹介された。調査によると、遠隔においてどれくらい適切に意思疎通ができたかについて、評価する側は、評価される側よりもやや高く評定する傾向にある。また遠隔に対して、評価する側は肯定的な意見が多いが、評価される側には否定的な意見が多く、さらに評価される側は、臨場感や場の雰囲気などを重視する傾向がみられるという。こうした調査を踏まえ、「わざわざ」出てくることの重要性が強調された。さらに危機管理における学長のリーダーシップについての調査が紹介された。発信頻度が高い大学は、対象を絞り込み、具体的な方針を述べることが多い。また発信頻度が高い大学は、対象を特化しメッセージを集中的に発信する点で、企業のメッセージ戦略と類似した傾向が見られるという。最終的に、オンラインで失われるのは、文脈、また話者とは別の人の顔や動きなどの非言語的な情報ではないかということ、さらに激励・助言・勇気づけによる日常的な教員－学生間のコミュニケーションも学生支援の視点から大切ではないかということが確認された。

渋井報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○わざわざが大切というのが興味深かった。大学の授業に関して、学生はオンライン授業の方が楽なので、アンケートを採ると、オンライン授業の方が良いという結果が出たりする。しかし教員の側からすると、わざわざ出てきたのだからちゃんと授業を受けないともったいないという意識を学生に持たせるためにも、対面に来させたほうが良

いと考えたりもする。つまり、学生にとっては「わざわざ」は嫌で、教員からすると「わざわざ」出てこさせるほうが良いという視点の違いがある。これに関して、どう考えるか。

- 学生が対面授業を嫌がるというのは興味深い。結局のところ、学修成果がしっかり出ていれば、どちらでも良いのではないか。ただ、教える側として、出てきて聞くところに意味があるとするなら、何か魅力をもたせる必要があるのではないか。例えば対面ではよりインタラクティブな授業をするなど。
- 学修成果の可視化のところで、いくつかの測定方法の紹介をされてたが、これは基本的に教養で、一般的なジェネリックスキルをみたいなのを測るものとして想定されているのか。
- 例として挙げたものはそういった傾向だが、あとは例えば、資格と学修成果が結び付いている法科大学院とか医学系とかはやりやすい。
- 恐らくオンライン授業というのは、モチベーションの高い人にとっては非常に有用な学修ツールであって、モチベーションの低い人にとっては単位捕獲機能としては有効だけれども、学修機能としてはモチベートする力が弱くなる可能性がある。教える側としては、これが一つ大きなデメリットとしてあり得る。そういったデメリットをいかにメリットに変えるかのアイデアをこれから出していく必要があるが、それをしないまま、オンライン授業の単位取得の幅をただ単に多く認め学修者の利便を高めるという単純な理屈で進めてしまうのは、非常に危険だ。個人的に、デメリットをメリットに変える一つの方法としては、オンライン授業での単位取得率とか GPA を、その後のオンライン授業を履修する資格と絡めるということがあり得ると考えている。ちゃんとオンラインで学修できることを証明した人に、オンライン授業の機会を提供するという形である。このような、デメリットをメリットに転換することについて、何かアイデアや意見があれば教えていただきたい。
- 対面授業でも当然モチベーションの高い学生と低い学生というのはいたが、オンラインではそれが両極端になりやすい可能性がある。モチベーションを高めるという点に関してはおそらく、非言語的なものもある。今、先生の顔が見えるから多少やりやすいし、リアクションがないと、とてもやりづらいだろう。
- 評価の際に、評価される側は、オンラインではちゃんと伝えられてないのではないかと考え、一方で、評価する側は大丈夫と思ってるっていうズレが興味深い。この場合の評価される側というのは、大学の授業だと教師側に当たるのか、生徒側に当たるのか。これは実は教師側に当たるのではないか。オンラインは伝えようとする側からするとなかなか伝わっていないのではないかという不安が残る。でも他方で、見る側はそこにすべて情報が入っていると思っている。ここで結構ギャップが出る。先ほどのデメリットをメリットに変えるアイデアという話であれば、オンラインでこそ、人数少なくして学生にとにかく発表させて、教員側が黒画面にして評価だけするという形にすると、学生は頑張るのかもしれない。
- ありがとうございます。確かにそのとおりだと思う。
- 根本的なことだが、特に教養の授業で、学修効果は測れるものなのか。オンライン授業だと、知識がちゃんと伝わったかというところで測らざるを得ない。もちろん対面授業でもそれで測るわけだが、対面の、一期一会の、その場での、言語外でのコミュニケーションの重要性というのはないのか。でもそれは評価しようがない。だから、オンライン授業・対面授業のメリット・デメリットもそうだし、あるいは、いろんなことでわれわれは評価されるわけだが、どうしても理不尽さを感じてしまう。評価できないところのほうが大事なのではないか。

- 同じような話で、オンライン授業では結構、政治的に正しいことをしゃべらないといけないという制約が強く働く面があり、発言が慎重になってしまう。その場限りの不規則発言ですみませんとか、適当にごまかせない。しかし、そのようなギリギリを攻めるところに楽しさが結構ある。オンラインではそういった制約がかなりある。また、一期一会で共有してる貴重な時間のなかで何かかけがえのなさを求めるというのは、確かに重要だ。ただ、オンラインになるとそれがなくなるものなのか、私には分からない。
- 学生がオンラインを好むという話に渋井先生が驚かれていたのに驚いたのだが、そこには世代の違いもあるのではないかな。そういうことも含めて調査していくことが必要なのではないかな。また、「臨場感」という言葉も恐らく学生側からは出ないだろう。そういったことについてはどう思われるか。
- 世代の問題というのは確かにあるだろう。学生は動画を観るのに倍速とか、4 倍速までいけるとか、そういうことを考えている。学生にとっては効率の話であって、当然そうしたくなるし、つまらない話は聞かないという話になってくる。いったいそこで失われるものが何なのかを調べる必要があるだろう。私としては、究極的には、学修成果の測定にしかならないと考えている。結局、単位を認定するにふさわしいかどうかという問題にならざるを得ないのではないかな。実際、昔から、授業に出るよりも図書館で勉強してたほうがよほど効率的ということはある。大学の授業というのはそういう傾向があり、そういった側面は否定できないかもしれない。

おわりに

新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、昨年度（2020 年度）には大々的にオンライン授業が導入されることになった。今年度（2021 年度）もその状況が続いたが、昨年度の経験もあり、以前のような技術的なレベルでの混乱はほとんどなくなったといって良い。来年度（2022 年度）以降からのオンライン授業の正式導入が議論されるなか、今年度はこれまでの経験を総括しつつ、より効果的・効率的なものへとオンライン授業を改良していく段階にあった。特に大人数の教養科目は、科目の特性上、必修科目やゼミ科目に比べてオンライン化の要望が強い一方で、オンライン化による教育効果の減少が危惧されている。大人数教養科目の担当教員は、多かれ少なかれ、「興味のなさそうな学生をこちらに振り向かせる」ことに工夫を凝らしてきたが、オンライン化によってそのような工夫を考え直さなければならなくなっている。本プロジェクトでは、オンライン授業で必要となるそのような工夫を共有・検討し、オンライン授業のさらなる改善を目指したわけだが、一定の成果をあげることができたのではないだろうか。

（文責：竹内綱史）